



だいごう
第12号

たんぽぽ通信



Contents

- 遠山所長より
- 運動会 ・ マラソン大会
- ドリームスポーツ大会
- 太鼓の全国大会
- 成瀬節子さんお悔やみ
- 作業所まつり
- 育ちつづける人たちを読んで

第12号 平成23年12月28日発行

発行 社会福祉法人たんぽぽ福祉会
代表 小板 孫次

〒509-7206

岐阜県恵那市長島町久須見 1083-35

TEL 0573-26-4356

FAX 0573-26-5827

ホームページ

<http://www13.ocn.ne.jp/~tan-popo/>

遠山所長より

かつて経験したことのない大震災にあい、福島県原発問題と何百キロも離れている岐阜県もその影響は少なからず受け、生活全体は下向きになりがちな一年でありました。

しかし災害に対する危機管理意識と体制（リスクマネジメント）は誰もが考えさせられた一年でもありました。

また、私達にとって重要な事は、障害者自立支援法が施設体系を夜勤支援と、日中支援に分離して第一種・第二種とある社会福祉事業を日中支援事業はこれまでの第一種から第二種社会福祉事業にしてしまったという事です。これは何を意味するかというと企業やNPO等の福祉事業の参入が増加し、施設は今後経営力を問われ、経営力の無い施設は事業から退場するという事です。

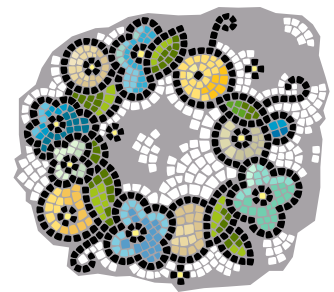
福祉施設の本来の姿、守るべきものは何かという事を考えた時、その中にいる障害を持って施設を利用している人達を一番に考えなくてはなりません。

そのためには、どれだけ法体系が変化しても動じない力をつける事だと思います。

たんぽぽの場合、保護者と職員の方で利用者の強い心と身体を育て利用者に対して人として生活できるお金を賃金として支払える体制づくりが必要なのです。そのために良い物を作って売っていかなくてはなりません。福祉施設だからの恩情ではなくもう一度ほしくなる物づくりを目指さなくてはなりません。

利用者の強い心と身体を育てるという事はとてもむずかしい様ですが、これは毎日の生活の事です。

毎日感謝し健全に生きるという事に尽きないと思います。朝起きて、御飯を食べ仕事をしてお風呂へ入って「一日ありがとう」と思って寝る。これを毎日繰り返していると人間は必ず、「もっと次に——がしたい」という思いが出て来ます。出て来ない人には、家族や職員が仕掛けていけばいいのです。



これが成長ではないかと思えます。来年は「ありがとう」と口に出して言い合える毎日の目標にしたいと思っています。

何しろ前を向いて進みましょう。良い年にしたいものです。



所内運動会 「暑さに負けない熱気でした」



9月14日たんぽぽ作業所内グラウンドで運動会が開催されました。

天気は晴天で利用者さんの緊張や気合が高まる中開会式が行われ、準備体操で利

用者さんの緊張が少しずつほぐれていったと思います。開会式が終わり、紅白に分かれての熱い戦いが繰り広げられました。

玉入れ、綱引き、ふれあいラリーフライングデイスク、大玉ころがし、どの種目でも皆さん

からの声援が聞こえ、その声援に応じようと種目ごとに皆さんが出場した種目一つ一つ全力でやりきっていました。

勝負は接戦で白の勝でしたが、どちらもみなさんが全力を出しきれたことに間違いはありません。

今年の運動会は夏の暑さが残っていて蒸し暑い一日だったので、利用者さんの体調面が心配になりましたが、暑さに負けず、汗を流しながら一生懸命に走り、応援していた姿がとても印象的でした。皆さんが頑張れたぶん、一つ一つが良い思い出になったと思います。

マラソン大会

平成23年10月2日に海津市の木曾三川公園で長良川ふれあいマラソン大会があり、13名が出場しました。9月のはじめから、午後の作業終了後にたんぽぽ周辺コースを利用し、一カ月ほど練習してきました。暑さや疲れで皆さん

ん練習が嫌になってしまいうこともありましたが、練習でタイムがあがるとまた頑張ろうと練習に打ち込むことができました。9月15日には所内運動会があり、出場者は練習の成果をみせてくれ、さらにパワーアップしようと頑張ってくださいました。そしてまた半月練習をつづけ、ふれあいマラソン大会当日はそれぞれが力一杯走り、日ごろの成果を出してくれたとおもいます。そして、マラソン大会は授産製品の販売やみなも体操や抽選会など催しもあり、皆さん楽しめました。また来年も利用者の皆さん一人一人が来年も出場したいと誓ってくれています。また定期的に練習等企画し、皆さんに参加してもらえるよう支援して行きたいと思います。



ドリームスポーツ大会



平成二十三年十月十六日(日)、ドリームスポーツ大会へ行ってきました(岐阜メモリアルセンター)。今年は、太鼓の全国大会と重なり、職員の数、手伝っていただけの利用者さんの数も少ない中でしたが、沢山の保護者さんの御協力により、何とか無事行ってこれました。前日の夜まで雨が降り、どうなるかと不安でしたが、皆の元気が天気まで変え、思いつきり元気に参加してきました。食堂街は相変わらずの大にぎわいでした！毎年思いますが、たんぽぽパワーはすごいですよ！たんぽぽの皆は自分の欲しい物を選び、買う事があたりまえに出来る人が

ほとんどです。他の施設さんは、職員の方が人数分まとめて、同じ物を買っていかれる場面もみられました。お金を使う楽しみがそれでは持てません。自立もありません。私達たんぽぼでは当たり前と思ってやっている事ですが、自分のお金を自分で使い、自分の欲しい物を自分で選ぶ事！それは本当に大切ですよ！そこから生きがいへとつながると思っています。いつか、岐阜県内の施設さんが全て、同じ様に金銭支援に取り組んでほしいと思います。そういった学習の場を裏から支え御協力いただいた保護者さん方、本当におつかれ様でした。ありがとうございました。

太鼓の全国大会



10がつ16にちたいこのぜんこくたいかいにでるためにひょうごまでいきました。はじめにいききました。とおかつたのでまえのひからいき、リハーサルをしました。とうじつもほんばんギリギリまでみんなでリズムあわせをするなどしてれんしゅうをしていました。ほんばんはおおぜいのみんなにみてもらってきんちゅうしました。まいにちたたいれんしゅうはたいへ

んやっただけどたたけてよかったです。
たのしかったです。

伊佐地工

こんにちは、私たちは「恵那のまつり太鼓」です。岐阜県にある知的障害者施設「恵那たんぽぽ作業所」の太鼓チームです。恵那たんぽぽ作業所では、行事の時に全員で壱宗竹を使用し、総勢二百三十名で太鼓の演奏を行っています。

恵那のまつり太鼓は、日ごろお世話になつて
いる地域のみなさんに、感謝御礼の気持ちを込
めて、精一杯力を込めて演奏しています。

現在では市内だけでなく、県外からの太鼓の
演奏依頼も入るようになりました。会場がどこ
であっても、精一杯気持ちを込めて演奏するこ
とで、聞いてくれるみなさんに気持ちが伝わる
と思つています。

まわりの音を聴きながらみんなとテンポを合
わせて打つのは難しく、なかなか上手いかな
い時もあります。みんなと息を合わせて演奏
出来る様に頑張つて練習しています。私たちの
演奏を聴いてくれる人に、演奏の楽しさ、
真剣に頑張つている姿などを伝え、感動を与え

られるような演奏をしたいです。また、そう感
じていただけるように練習を頑張つていきたく
と思います。

いま、みんな練習している曲が、喬演奏す
る「和」という曲です。この曲は岐阜県太鼓連
盟の服部勝利先生に作つていただき、指導して
いただいた私たちにとって大切な曲です。左右
で異なったパートを打ち、かけ合う曲になつて
います。なかなか大きな声を出すことが出来ず、
表情も硬くなつてしましますが、練習した成果
を出せるよう、一生懸命演奏したいと思つています。



成瀬節子さんお悔み



平成23年10月3

1日に成瀬節子さんが
78歳で亡くなりました
た。たんぽぽで最高齢
だったため、たんぽぽ
の敬老会ではみなさん

にお祝いをしていただきました。作業は工芸班
にて紐結びの仕事をされてきました。節子さん
は平成13年からデイサービスを利用され、平
成18年にアメニティーハウス・エナに入所さ
れました。賑やかな場所が大好きで特売やお出
かけ等楽しみに生活されてきました。誰かが困
つていたりすると大きな声をだし職員に教えて
くれようとすることもある優しい方でした。皆
さんとお話したりすることも大好きでみんなの
輪に入るとニコニコされ、楽しそうでした。と
にかくたくさんの人に囲まれたところが大好き
でたんぽぽからおうちへ帰省されたとき、たん
ぽぽへ帰りがりお姉さんを困らせた事もあり
ました。家族の方のお話の中で、在宅ですつと

過ごされてきた節子さんがたんぽぽへ行くことで仕事をしてお金を貰うということ、生活をしていくという生き甲斐を見つけることができ、生き生きとして生活できたと最後の挨拶をしてくださいました。私も支援していくなかで節子さんがたんぽぽの生活を大好きでいてくださることを実感してきました。

節子さんや家族の方にそのように思っていた、嬉しく思いました。そして、今後、支援していく上で微力ながら皆さんが良かったといっていただけのような支援を心がけていきたいとおもいます。

作業所まつり

12月11日(日)恵那市中公民館にて作業所まつりが行われました。オープニングでは恵那の祭り太鼓が演奏をしました。

会場は数多くのバザー用品、授産製品、手作り品などが並び、動くのが大変なほど多くのお客様で賑わっていました。

また食堂街ではラーメンやそば、焼きそば、パン、五平餅、揚げ物など食べ物が売られ、みなさんおいしそうに召し上がっていました。座るスペースがあったので、ゆったりと落ち着いて食べる事が出来たと思います。

デカ盛りでは、食品加工からは鬼饅頭、福祉工場からは弁当、千田からはお餅、厨房からは五平餅、桜台からは岩豆腐が出されました。利用者さんの中で、鬼饅頭のグラム数を当てて、もらっていった人もいました。

午後からは恵那の祭り太鼓の演奏、オーケシヨンなどがありました。オーケシヨンはとても盛り上がり、会場のあちらこちらから声が上がっていました。職員で、ギターを落とした人もいました。

最後に皆さん待ちに待った餅投げがあり、まつりが締めくくられました。

とても寒い中でしたが、多くの方に来ていただき、また利用者の皆さんもそれぞれに楽しむ事が出来たようです。

作業所まつりを開催するにあたって、多くの方に協力いただきました。保護者の方にも、手作り品など準備で何日も前からお手伝いして



いただきました。本当にありがとうございました。

育ちつづける人たちを読んで



この本を読んで、私

は、恵那たんぽぽ作業所が大変な苦勞をして出来たのを知りました。今でも障害者に対する差別は続いていますが、昔は、何かの崇

りだと言われ、地域の人達から偏見の目で見られる時代だったそうです。今は少しは改善されていますが、今でも、部屋に鍵をかけて閉じ込めておく施設が残っています。たんぽぽの理念で「どのような障害があろうとも、人はすべて同質であり同等でなければならぬ」という言葉があります。なのでたんぽぽでは、割れる陶器の食器を使っているし、割れるガラスの壁を使用しています。陶器を落としたら割れてしまうという常識を教えるために、多くの陶器が割れてしまうでしょう。しかし、家でプラスチック製の食器を使っている家は少ないです。

部屋に鍵がないのも、自分たちが自由に出入り出来て当たり前という常識があるからです。しかし、そのために、無断外出をする人が出て来ます。昼間の無断外出はまだ明るいので探しやすいのですが、夜の無断外出は、暗闇の中の捜索になりますし、時間によっては深夜に呼び出しがかかることもあります。

本には、鍵をかけない理由は二つあり、一つは障害のある人達の信頼を失ってしまうこと、二つ目は、職員チームが本来やるべき本当の意味での管理をしなくなり、抑圧された感情を理解することが難しくなり、様々な人間的な感情への配慮を知らず知らずのうちに忘れてしまうことだそうです。

本を読んで改めて感じたのは、たんぽぽ作業所では、着ている服もみな違う、特売や選択メニューもある。海水浴や旅行までもいく。外食や買い物にも行く。旅行に行ったり、買い物に行く回数は普通の人より少ないかもしれませんが、普通の人と同じ様に生活している様に感じます。

外食、買い物に行くのは担当の仕事です。たんぽぽ作業所に入った時に言われた言葉が

あります。「この人にはもうこれ以上の仕事は無理だ」と思ったとしたら、その人の育つ可能性はそこで閉されてしまうだろう。しかし逆に、「この人はここまでできたから次の仕事もきっとできるに違いない」と考えて支援すれば、その人は確実に育っていくことになる。私は今後、支援をするにあたって様々な壁に立ち向かうことになるだろう。でもあきらめず立ち向かいます。十回教えてダメなら百回、百回やってもダメなら千回もしくは教え方を工夫してみたりして、最後まであきらめないことを誓います。

池戸 勇太 7



私が本を読んで、感じたことは障害者の方でも一つ一つのステップを踏んでいけば、健常者に負けないくらいの生活が出来ると思えました。

施設は多数同士が一緒に生活する場所なので、まずお互い協力をし、お互いに信頼していくこ

とが生きていくためのルールとなってきます。

この本を読んで、所長さんの考えには一つ一つの理由があることがよく分かりました。

ほかの施設とは違い、外から鍵をかけないことや窓に鉄格子がないこと、廊下がなくみんなが集まるホールがあること、そして陶器を使用すること、ご飯などおかわりが出来ることで、健常者と共に同じ生活をしていることが良く分かります。

支援員が出来ることは、あきらめずに毎日少しずつでも物事が出来るように努力していくことが大切だと思いました。支援員があきらめずに支援していくことが一番大切なことなのでこれから先利用者の方を信じて頑張っ行ってきたいです。

小野澤 啓



本を読んでみて、まず最初に感じたことは、所長さんの想像を超えるような熱い思いがあることです。たんぽぽ

を設置するために、障害を持った人達の為に、彼らが働いてお金を稼いで自立できる施設の必要性を、行政側に何度も駆け寄って、設置にこぎつけたことです。いまでは全国に当たり前の

ように施設があり、車いすに乗った方が、パンを売っている姿を時折目にするがあります。

ひと昔前では、障害者に対してかなりの偏見があったのですが、それではいけないという思い、彼らに普通の生活を送ってほしいという思い、が時代、そして行政を変えてきたと思います。

他の施設とは違い、彼らからの信頼を得るために外から鍵をかけないことや窓に鉄格子がないこと、廊下がなくみんなが集まるホールがあること、そして陶器を使用すること、必ずみそ汁などのおかわりができること、選択メニューがあること、炊きたてのごはんを自分でもりつけること、など多数、所長さんの考えひとつひとつに理由があるのがわかりました。

障害をもった人達が育っていくことには、ものすごく時間と根気が必要で、このひとの能力はこんなものだと決めつけず、あきらめず、無限の可能性を信じて、これからも利用者の皆さ

んと接していき、自分自身の成長もできたらいいなと強く思いました。

林 一道



った事を本を読んで知りました。

障害者と聞くと、何もできない、私たちと違うというイメージが出来てしまっています。昔は今よりも障害者に対する世間の差別意識が強く、たとえ施設があってもほとんど鍵や鉄格子が付いているということを知りました。私だったら自由もなく毎日同じような生活をする施設などとても耐えられません。信頼関係もきづいていけないと思います。でも、たんぽぽでは外からの鍵も鉄格子もなく、普通の家庭と同じような造りでした。寮の2階のガラスや階段、ホール、部

屋の造りの違いなど些細な部分でもその人の個性や、成長、コミュニケーション、信頼関係などいろんな事に関係した重要なものなんだという事を知りました。

毎日やっている作業でも、利用者の成長や発見がよくみられます。

私は今食品加工で利用者と共に作業をしています。食品加工では包丁を使ったり、重いものを持つったり、計量して袋詰めをしたりと危険で技術のいる作業です。それでも最初は洗いや野菜を切る事しかできなかった人でも、こつこつ教えていくうちに計量や煮込み作業など少しレベルの高い作業が出来るようになった人があります。またある人は私たちでもあまり書かない漢字を書いて見せてくれた時は、その人の以外な一面を発見できました。作業を通して利用者の成長や感情がとてよく伝わって私も勉強になったことがたくさんありました。

実際の作業や行事、生活からいろいろ勉強になりましたが、本から伝わった、タンポポ作業所の理念や仕事を通してその人の持つ可能性の育みなどを知ることが出来たと思います。

私はまだ1年目でわからない事もたくさんあ

ります。でも、利用者が1日でも楽しく生活が出来るように努力していきたいです。

青山 恵利

助成金をいただきました

社会福祉法人岐阜県共同募金会様より平成23年度「NHK歳末たすけあい募金」の配分をいただきました。

12月26日にクリスマス会を開催し、その準備、開催費用に充てさせていただきます。ありがとうございます。



編集後記

今年もあとわずかです。

大きな震災があり、私達が大切にしなければいけない物が少し変わった様に思います。電気の大切さを知り、水が当たり前になる生活、そして食べる物がある。私達には当たり前のことですが、それが何よりのありがたいことだと思いました。

先日、バスで帰る人の見守りをしました。毎日バスで通っているS君に対してバスの運転手さんは前の扉を開けてくれたり、高校生の方が席をゆずってくださいる場面を見かけました。とてもありがたかったです。地域のみなさんにあなたかく見守ってもらっている事を感じました。私達職員は時々、利用者の方に対してどうしても理解して欲しい事、分かって欲しいと思う時に大きな声を出してしまったりしてしまう事もありました。気をつけなければいけないと思いつつ、利用者の方々に、障害を持っていても一人の大人として地域の中で生活していく中で、素直にありがとう、ごめんなさいを言える人になってほしいという思いがあります。これからは一呼吸をついて、支援をしていきたいと思えます。来年もよろしく願います。